

はじめに

本書は、「大学入学共通テスト」現代文問題の対策のため、単元別（各大問のタイプ別）に演習を行う問題集です。収録した問題はすべて、駿台予備学校の現代文科講師が共同で練り上げたオリジナル問題です。内容・形式ともに、実際の大学入学共通テストを想定して作題したもので、単元別に集中して演習を重ねること、解法が自然と身につくようになっていきます。この問題集に取り組むことで、大学入学共通テスト対策の第一歩を踏み出しましょう。

構成

*以下の「大学入学共通テスト」に関する記述は、二〇二三年六月時点の情報に基づいています。

▼大学入学共通テスト国語の問題構成

大学入学共通テストの国語は、90分で次の5大問に解答するという問題構成です。

大問	出題分野	解答方法	題材	配点
第1問	現代文	マーク	論理的文章問題	45点
第2問	現代文	マーク	文学的文章問題	45点
第3問	現代文	マーク	資料型総合問題	20点
第4問	古文	マーク		45点
第5問	漢文	マーク		45点

▼この問題集の構成

論理的文章問題……5題 文学的文章問題……5題 資料型総合問題……5題 計15題
という構成です。それぞれの単元の中でおおむね易から難へと問題を配列してあるので、取り組むほどに力がついていくようになっていきます。

この問題集で各大問ごとの解法を習得した後は、本番同様に現代文・古文・漢文をセットにした問題集などで、実戦的な練習問題に取り組んで下さい。

※なお、第1問・第2問については、二〇二五年度より配点が各50点から各45点になることに伴い、多様な形式での出題が想定されます。このため本書では、従来の出題形式を踏まえつつ、想定されうるさまざまな形の問題を収録しています。

目次

■はじめに／構成	2
■大学入学共通テストの出題の特徴／各設問で求められる力の表示について	4
■この問題集の使い方	6

論理的文章問題

① 井筒俊彦「記号活動としての言語」／最果タヒ「わからないぐらいがちょうどいい」	8
② 古田亮『日本画とは何だったのか』／菱田春草「画界漫言」	22
③ 桑子敏雄『生命と風景の哲学』	34
④ 松木武彦『美の考古学』	46
⑤ 北山恒『モダニズムの臨界』『未来都市はムラに近似する』	58

文学的文章問題

① 湊かなえ『物語のおわり』	72
② 吉田修一「キャンセルされた街の案内」	84
③ 辻邦生「橋」『作品制作に関する『日記』抜粋』	96
④ 太宰治「列車」	106
⑤ 大崎善生「神様捜索隊」／吉原幸子「冒瀆」	118

資料型総合問題

① 若者の自分意識	132
② コミュニケーション	144
③ 条件付特定外来生物	154
④ 外国人観光客誘致	168
⑤ リスクリテラシー	176

大学入学共通テストの出題の特徴

大学入学共通テストでは、〈思考力・判断力・表現力〉を重視した出題がなされます。具体的には、

① 複数テキストによる出題——二つ以上の文章を組み合わせたり、文章と資料・会話文などを組み合わせたりと、複数のテキスト（書かれたもの）を見渡してそれらの関連性をとらえる力を試す問題が出題されます。

② 実用的場面を想定した出題——通常の文章読解だけでなく、現実生活の中での場面設定に基づく設問が出題されます。生徒の学習場面という設定でノート・メモ・図などが提示され、それを基に本文の内容を整理したり発展的に考えたりする設問や、複数の人の会話・討論という形の設問などです。また、グラフや表などのデータ、図・画像などや実用的な題材の文章・資料も出題されます。

③ 応用的・発展的思考力を必要とする設問の出題——本文に直接〈書いてあること〉を把握する設問だけでなく、応用的・発展的思考を求める設問が出題されます。例えば、本文にない具体例を考える設問、本文の記述を抽象化・一般化して考える設問、本文の論旨を本文以外の話題に応用して考える設問、本文の論旨をもとに論理的な推論を行う設問、複数のテキストの共通点・相違点を考える設問などです。

この問題集に収録した問題は、内容・形式ともに、以上のような大学入学共通テストの特徴を踏まえて作成しています。大問別の傾向・対策は、各単元（大問）の扉に示しましたので、詳しくはそちらをご参照下さい。

各設問で求められる力の表示について

大学入学共通テストの設問の特徴を把握してもらうために、この問題集では、各設問で求められる学力の内容を、**知識・技能**・**探究・取り出し**・**統合・解釈**・**熟考・評価**・**構成・表現**の五つの項目で表示しました。

〈思考力・判断力・表現力〉の前提となるのが**知識・技能**です。漢字・語彙・文法・文学史や、グラフや図の読み取り方など、国語に関する知識・技能のことで、漢字・語彙の記憶などの形でふだんから身につける努力をする必要があるテキスト外の力です。

〈思考・判断〉のプロセスは、次のような三段階でとらえることができます。

① テキストからの情報の探索・取り出し。テキスト内の特定の部分から目的に応じて情報を取り出す力です。テキストの一箇所ないし狭い範囲の部分に依拠した設問などは、このレベルで解答可能なものです。

② テキストの情報の統合・解釈。一つのテキストの全体、ないし複数のテキスト同士の関連を踏まえて、情報の統合・構造化・解釈を行う力です。複数の箇所に依拠する設問、本文全体の要約、さらに目的に応じて複数のテキストの情報を組み合わせまとめるような設問は、このレベルの力を必要とします。ただし、あくまでテキスト内の情報の処理にかかわる（従来の言い方であれば〈本文に書かれてあること〉で解答できる）レベルです。

③ テキストの情報に関する熟考・評価。テキストの情報について、自らの思考力や経験・知識などを生かしてテキスト外からとらえ直していく力です。テキストの情報に基づく推論、経験や知識に基づくテキストの内容の補足や精緻化、特定の立場に基づくテキストの内容の評価、テキストに基づく新たな考えの形成などを求める問いがこれに当たります。例えば、〈本文に書かれていないこと〉を推論したり、独自の具体例を考えたり、二つの文章について、一方の観点から他方をとらえ直したり、両者を踏まえて新たな考えを導いたり、といった設問では、このレベルの力が必要とされます。

以上のようなプロセスを経て得られた思考・判断は、他者に伝えるために〈表現〉される必要があります。この問題集では、解答に当たって特に表現に関する留意・工夫が求められる設問を、〈構成・表現〉と表示しました。文章の展開・構成のしかたや表現のはたらき・技法などを問うものがこれに当たります。ふだんから筋道を立てて文章を書いたり話したりする、テキスト外での言語活動によってつちかわれる力だといえます。

		知識・技能	問1
	探索・取り出し	知識・技能	問2
	統合・解釈		問3
	統合・解釈		問4
	統合・解釈		問5
構成・表現	熟考・評価		問6

この問題集の使い方

① まず、論理的文章問題・文学的文章問題は1題20分程度、資料型総合問題は1題15分程度を目標として、問題文・資料を読み、設問に解答する。(問題冊子の最後にマーク解答欄が付いていますので、練習用にコピーして使用して下さい。)



② 〈答え合わせ〉をする。



③ 時間をかけて、読み直し、考え直す。特に、〈答え合わせ〉の結果、自分が正答できなかったと判明した設問については、自分が気づかなかった〈正答〉の根拠は何か、自分が選んでしまった答えのどこに間違いがあるのかについて、解説を読む前にもう一度考えてみる。



④ 解説を読む。問題文・資料についての理解を深め、設問解答の道筋(特に③で考えたこと)について確認し、今後の学習に生かすべきポイントをつかむ。

*学校の授業や課題として使う場合は、先生の指示に従って下さい。

論理的文章問題

・評論文・論説文・説明文などの論理的文章を題材とし、内容読解の設問を中心に、漢字設問、表現や構成・展開の設問などが出題されます。また、長い文章と短めの文章、あるいは、ともにある程度の長さをもつ二つの文章など、複数の文章について、それらの間の関連性を問う設問も出題されます。さらに、論理的文章に生徒のノート・生徒の書いた文章・生徒の会話など〈学習の場面〉を想定したテキストを組み合わせる形で本文から発展させた応用的思考を問う出題もあります。

・いずれにせよ、論理的文章と、関連するテキスト(他の文章や資料)という形ですので、論理的文章の内容をしつかりと把握し、それとの関連で他のテキストの意味やはたらきを考えていく、ということになります。



・読解・解答の手順は、次のようになります。

- ① まず、メインの論理的文章を、対比や同内容の繰り返しなどに注意して論旨を整理しつつ読み、概要を把握する。
- ② 別のテキスト(他の文章や資料)がある場合には、①でつかんだ文章との関連性(共通点や相違点など)を考えながら内容を把握する(別のテキストが設問の中に組み込まれている場合には、設問解答の際にその作業を行う)。
- ③ ①②でつかんだ本文や資料の概要を頭に置きつつ、設問要求をおさえ、それに関連する部分を再度確認して、設問要求の答えとなる内容を探り出し、解答を選ぶ。
- ④ 生徒のノート・生徒の書いた文章・生徒の会話といった〈学習の場面〉の設定に基づいて解答する設問では、(本文の内容に加え)それらが設定する文脈や、思考・議論の過程などもヒントにして解答を考える。
- ⑤ 判断に迷う場合は、
 - a 選択肢の全体を漠然と見るのではなく、要素ごとに吟味して、部分に仕掛けられた誤りを見抜く。
 - b 似たような選択肢は、選択肢同士を比較し、本文や資料の内容および設問要求に照らして(より妥当なもの)を選ぶ。

- ① 井筒俊彦「記号活動としての言語」/ 最果タビ「わからないぐらいがちょうどいい」… 8
- ② 古田亮『日本画とは何だったのか』/ 菱田春草「画界漫言」…………… 22
- ③ 桑子敏雄『生命と風景の哲学』…………… 34
- ④ 松木武彦『美の考古学』…………… 46
- ⑤ 北山恒『モダニズムの臨界』『未来都市はムラに近似する』…………… 58

文学的文章問題

・小説・韻文（詩歌）など、文学的文章を題材とし、内容読解の設問を中心に、表現や構成の設問、語意など国語の知識に関する設問などが問われます。

・小説と批評・エッセイ・韻文（詩歌）・テーマとして関連する別の文章など、何らかの形で複数の題材を組み合わせた形で出題される可能性が高く、また、論理的文章問題と同じく〈学習の場面〉を想定した出題もあります。
・本文の叙述そのものの読み取りはもちろん、叙述をもとに直接書かれていないことを推測することまで含めた作品世界の読解、さらに、作者の意図や表現のはたらきなどの考察などが、設問で問われる内容です。

⇐

・読解・解答の手順は、次のようになります。

① 小説（やストーリー性のある随筆）の場合は、リード文（前書き）や注なども踏まえつつ、時と場所、主要人物の属性や性格・置かれている状況、人物間の関係性などをおさえ、また各場面での心情やその変化、時制（過去の回想の挿入や、別の時点への飛躍など）に注意して、内容を把握する。

② 設問に関しては、「論理的文章（＋実用的文章）」の③④⑤と同様に考える。ただし、論理的文章以上に、本文の記述をもとにした推測や本文からの発展的理解が求められるので、迷わされる選択肢の中でも〈本文に照らしてより妥当性の高いものを選ぶ〉姿勢を徹底して練習する必要がある。

③ 設問の中に他の文章・資料などが組み込まれている場合には、メインの文章の内容を的確に把握し、それについての設問を解きながらさらに内容をしつかりと頭に入れた上で、他の文章・資料がそれとどのように関連しているかを考えつつ、設問要求に応じて解答を考えていく。

① 湊かなえ『物語のおわり』	72
② 吉田修一「キャンセルされた街の案内」	84
③ 辻邦生「橋」「作品制作に関する『日記』抜粋」	96
④ 太宰治「列車」	106
⑤ 大崎善生「神様捜索隊」／吉原幸子「冒瀆」	118

資料型総合問題

・複数の資料（通常の文章・グラフや表の形式をとったデータ・何かを説明するための図・図像など）を題材とし、個々の資料の読み取りと、複数の資料を組み合わせて考えを導き出す総合的・応用的思考を問う問題が出題されます。

・また、「学習の場面」を想定し、資料を用いながら生徒がレポートや文章を書いたり議論をしたりする（あるいはそれらの構想メモなどを作る）といった形式での出題となる可能性が高いと考えられます。

・設問では、「設問要求に従い文章・資料から必要な情報を探す」「複数の文章・資料の情報を比較したり対応関係を考える／それらを統合して考えを導き出す」「文章・資料の内容を基に論理的推論や類推などの応用的・発展的思考を展開する」「生徒の書いた文章などの推敲を行う」といった力が求められます。



・読解・解答の手順は、次のようになります。

- ① 〈リード文（前書き）〉から、どのような〈設定〉であるかを把握した上で、まず全体を見渡し、テキスト（文章・資料）がどのような組み合わせになっているかをつかむ。
- ② メインの資料（多くの場合、中心的な話題について述べた何らかの文章）の内容をざっと（大筋で）つかむ。サブの資料については、「メインの資料とどのように関係するものか」「話題・内容は大体どのようなものか」をおさえておいて、後で設問を解く際に、必要な情報を取り出せるようにしておく。
- ③ 設問要求をおさえ、それに従って各テキストから必要な情報を取り出し、設問要求・条件に応じて解答を導く。さまざまな形式で多角的な問いが設定されているので、「何が問われているのか」「その問いに答えるためには何をどのように考えていけばよいか」を見定め、それに沿って考えていく。

※④ 〈学習の場面〉設問、⑤ 〈判断に迷う場合〉については論理的文章問題の項を参照。

① 若者の自分意識	132
② コミュニケーション	144
③ 条件付特定外来生物	154
④ 外国人観光客誘致	168
⑤ リスクリテラシー	176

4 「列車」

学習日

次の文章は太宰治「列車」(一九三三年発表)の全文である。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 45)

一九二五年に梅鉢工場という所でこしらえられたC五二型のその機関車は、同じ工場で同じころ製作された三等客車三輛と、食堂車、二等客車、二等寝台車、各々一輛ずつと、ほかに郵便やら荷物やらの貨車三輛と、都合九つの箱に、ざっと二百名からの旅客と十万を越える通信とそれにまつわる幾多の胸痛む物語とを載せ、雨の日も風の日も午後の二時半になれば、ピストンをはためかせて上野から青森へ向けて走った。時に依って万歳の叫喚で送られたり、手巾で名残を惜まれたり、または嗚咽でもって不吉な銭を受けるのである。列車番号は一〇三。

番号からして気持が悪い。一九二五年からいままで、八年も経っているが、その間にこの列車は幾万人の愛情を引き裂いたとか。げんに私が此の列車のため、ひどくからい目に遭わされた。

つい昨年の冬、汐田がテツさんを国元へ送りかえした時のことである。

テツさんと汐田とは同じ郷里で幼いときからの仲らしく、私も汐田と高等学校の寮でひとつ室に寝起していた関係から、折に

ふれてはこの恋愛を物語られた。テツさんは貧しい育ちの娘であるから、少々内福な汐田の家では二人の結婚は不承知であつて、それゆえ汐田は彼の父親と、いくたびとなく烈しい口論をした。その最初の喧嘩の際、汐田は卒倒せん許りに興奮して、し

まいに、滴々と鼻血を流したのであるが、^A そのような愚直な挿話さえ、年若い私の胸を異様に轟かせたものだ。

そのうちに私も汐田も高等学校を出て、一緒に東京の大学へはいった。それから三年経っている。この期間は、私にとつては困難なとしつきであつたけれども、汐田にはそんなことがなかったらしく、毎日をのうのうと暮らしていたようであつた。私の最初間借していた家が大学のじき近くにあつたので、汐田は入学当時こそほんの二三回そこへ寄つて呉れたが、環境も思想も音を

20

立てつつ離叛して行っている二人には、以前のようなわけへだて無い友情はとても望めなかったのだ。私のひがみからかも知れないが、あるとき若し、テツさんの上京さえなかったなら、汐田はきっと永久に私から遠のいて了うつもりであったらしい。

汐田は私とむつまじい交渉を絶ってから三年目の冬に、突然、私の郊外の家を訪れてテツさんの上京を告げたのである。テツさんは汐田の卒業を待ち兼ねて、ひとりて東京へ逃げて来たのであった。

25

そのころには私も或る女と結婚していたし、いまさら汐田のその出来事に胸をときめかすような、そんな若やいだ気持を次第にうしなにかけていた矢先であつたから、汐田のだしぬけな来訪に幾分まごつきはしたが、彼のその訪問の底意を見抜く事を忘れなかった。そんな一少女の出奔を知己の間に言いふらすことが、彼の自尊心をどんなに満足させたか。私は彼の有頂天を不愉快に感じ、彼のテツさんに対する真実を疑いさえした。私のこの疑惑は無残にも的中していた。彼は私にひとしきり、狂喜し感激して見せた揚句、眉間に皺を寄せて、どうしたらいいだろう？ という相談を小声で持ちかけたではないか。私は最早、そのようなひまな遊戯には同情が持てなかつたので、君も伶俐になつたね、君がテツさんに昔程の愛を感じられなかつたなら、別れるほかはあるまい、と汐田の思つたつぽを直截に言つてやつた。汐田は、**B** 口角にまざまざと微笑をふくめて、しかし、と考え込んだ。

30

それから四五日して私は汐田から速達郵便を受け取つた。その葉書には、友人たちの忠告もあり、お互の将来のためにテツさんをくへ返す、あすの二時半の汽車で帰る筈だ、という意味のことがらが簡単に認められていた。私は頼まれもせぬのに、テツさんを見送つてやろうと即座に覚悟をきめた。私にはそんな軽はずみなことをしがちな悲しい習性があつたのである。

35

あくる日は朝から雨が降っていた。

私はしづる妻をせきたてて、一緒に上野駅へ出掛けた。

一〇三号のその列車は、つめたい雨の中で黒煙を吐きつつ発車の時刻を待っていた。私たちは列車の窓をひとつひとつたねねんに捜して歩いた。テツさんは機関車のすぐ隣の三等客車に席をとっていた。三四年まえに汐田の紹介でいちど逢つたことがあるけれども、あれから見ると顔の色がたいへん白くなって、顔のあたりもふつくりとふとっているのがあつた。テツさんも私の顔を忘れずにいて呉れて、私が声をかけたら、すぐ列車の窓から半身乗り出して嬉しそうに挨拶をかえたのである。私はテツ

40

さんに妻を引き合せてやった。私がわざわざ妻を連れて来たのは妻も亦テツさんと同じように貧しい育ちの女であるから、テツさんを慰めるにしても、私などよりなにかきつと適切な態度や言葉をもつてするにちがいないと独断したからであった。しかし、私はまんまと裏切られたのである。テツさんと妻は、お互に貴婦人のようなお辞儀を無言で取り交しただけであった。私は、まのわるい思いがして、なんの符号であろうか客車の横腹へしろいペンキで小さく書かれてあるメンブ 13273 という文字のあたりをこつこつと洋傘の柄でたたいたものだ。

テツさんと妻は天候について二言三言話し合った。その対話がすんで了と、みんなは愈々手持ぶさたになった。テツさんは、窓縁につつましく並べて置いた丸い十本の指を矢鱈にかがめたり伸ばしたりしながら、ひとつ処をじっと見つめているのであった。C 私はそのような光景を見て居れなかつたので、テツさんのところからこつそり離れて、長いプラットフォームをさまよいて歩いたのである。列車の下から吐き出されるスチムが冷い湯気となって、白々と私の足もとを這い廻っていた。

45

私は電気時計のあたりで立ちどまって、列車を眺めた。列車は雨ですっかり濡れて、黝く光っていた。

三輦目の三等客車の窓から、思い切り首をさしのべて五、六人の見送りの人たちへおろおろる会釈している蒼黒い顔がひとつ見えた。その頃日本では他の或る国と戦争を始めていたが、それに動員された兵士であろう。D 私は見るべからざるものを見たよ

うな気がして、窒息しそうに胸苦しくなった。

50

数年まえ私は或る思想団体にいささかでも関係を持ったことがあって、のちまもなく見映えのせぬ申しわけを立ててその団体と別れてしまったのであるが、いま、こうして兵士を眼の前に凝視し、また、恥かしめられ汚されて帰郷して行くテツさんを眺めては、私のあんな申しわけが立つ立たぬどころでないと思ったのである。

55

私は頭の上の電気時計を振り仰いだ。発車まで未だ三分ほど間があった。私は堪らない気持がした。誰だつてそうであろうが、見送人にとって、この発車前の三分間ぐらい閉口なものはない。言うべきことは、すっかり言い尽くしてあるし、ただむなしく顔を見合せているばかりなのである。まして今のこの場合、私はその言うべき言葉さえなにひとつ考えつかずにいるではないか。妻がもつと才能のある女であったならば、私はまだしも気楽なのであるが、見よ、妻はテツさんの傍にいながら、むく

れたような顔をして先刻から黙って立ちつくしているのである。私は思い切ってテツさんの窓の方へあるいて行った。

発車が間近いのである。列車は四百五十哩マイルの行程を前にしていきりたち、プラットフォームは色めき渡った。私の胸には、もはや他人の身の上まで思いやるような、そんな余裕がなかったので、テツさんを慰めるのに「災難」という無責任な言葉を使った。しかし、妻は列車の横壁にかかつてある青い鉄札の、水玉が一杯ついた文字を此頃このころ習いたてのたどたどしい智識ちしきでもって、FOR A-O-MO-RIとひくく読んでいたのである。

(注) 1 三等客車——当時、鉄道の客車には一等から三等までの等級が存在した。

2 高等学校——旧制高等学校。標準的な修業年齢は一七歳から二〇歳。

3 内福——見かけより内実の裕福なこと。

問1

傍線部A「そのような愚直な挿話さえ、年若い私の胸を異様に轟かせたものだ」とあるが、「私」はなぜ胸を轟かせたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 1。

- ① 大切に育んできた恋愛を反対され、父親と初めて激しい口論をして興奮のあまり鼻血を流すという、その真摯な正義感にひどく感動したから。
- ② 純粋な恋愛を身分の差といったことによって不当に引き裂こうとする父親の話が、古い権威による横暴の象徴のように思われ、義憤に駆られたから。
- ③ 愛し合っているながら親からの反対で結ばれないという事情は、実は自分が置かれている状況でもあり、その一致に驚きと心からの共感を持ったから。
- ④ 家柄が違うとして結婚を反対されながらも、旧弊^{あが}に抗って恋の情熱を貫くといった話が、いかにも純粋でロマンチックなものに思われたから。
- ⑤ 幼い頃からの恋心をそのまま持ち続け、親に反対されながらもそれと決死の思いで闘ったという恋愛の行く末に、強い好奇心をかき立てられたから。

問2 傍線部B「口角にまざまざと微笑をふくめて、しかし、と考え込んだ」とあるが、このときの汐田の説明として最も適当

なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 2。

- ① 自分からではなく人からの勧めで恋人と別れるということにしたいと考え、そう言うであろう友人に相談したところ、まふんと別れると言ってくれたのでしめたと思うが、それを表情には出すまいとしている。
- ② 実のところ別れるかどうか迷っていたところへ別れるほかないという助言を得、気持ちが決まってほつとしたものの、それで本当にいいのだろうかと再度自分の本心を確認しようとしている。
- ③ はじめから別れることを決めていた自分の気持ちに沿う応答を聞いて、内心我が意を得たりと思っているが、表向きはあくまで自分を思い上京してきた恋人への誠意を気取ろうとしている。
- ④ 恋人が上京した喜びと感激で別れようとしていた心が揺らいでいたが、事情を知る友人に背中を押してもらったことで決心がつき、これからどうやって相手に別れを切り出そうかと思案している。
- ⑤ 別れるという自分の意を汲んでくれるだろうと予測した上で相談したところ、友人はそういう自分の小ずるさをほめてくれたと思ひ得意になったが、とはいえ少しは真面目なところも見せようとしている。

問3

傍線部C「私はそのような光景を見て居れなかったので、テツさんのところからこっそり離れて、長いプラットフォームが、こまよい歩いたのである。」、D「私は見るべからざるものを見たような気がして、窒息しそうに胸苦しくなった。」とあるが、この「私」の思いには共通するものがあると考えられる。それはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 3。

- ① うまく立ち回ったり小ずるく生きたりということができない者たちをいたましく思う気持ち。
- ② 自らにふりかかる運命をひたすら従順に受け入れるだけの者たちに対する否みがたい嫌悪感。
- ③ 周りの人の好意にそつなく応じることのできない不器用な者たちへの共感。
- ④ 心の中の本当の思いを打ち明けるすべもなく流されていく者たちを苛立たしく思う気持ち。
- ⑤ 逆境に置かれ絶望の淵へと沈んでいく者たちを前にしての無力感といったたまれなさ。

問4 この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑤のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

解答番号は

4

5

- ① 冒頭の列車の描写は、列車にまつわる感情をある方向に誘導し、後半に展開される物語の山場における舞台装置をあらかじめ設定しておく役割を果たしている。
- ② この物語は基本的に「私」の視点によって語られるものであるが、17行目「汐田はきっと永久に私から遠のいてしまうつもりであつたらしい」のように、ところどころで他の人物の視点も取り入れられ、物語に立体感を与えている。
- ③ 24行目「どうしたらいいだろう？」や26行目「しかし」は汐田の台詞であるが、「」を使わずに書かれているのは、それが汐田が言ったことの一部にすぎないことを表すためである。
- ④ 38行目「お互に貴婦人のようなお辞儀を無言で取り交したただけであつた」における「貴婦人のような」という比喩は、妻とテツさんが思わぬ上品さをかいまみせたのを面白がっている主人公の気持ちを効果的に表すものとなっている。
- ⑤ 55行目「見よ、妻はテツさんの傍にしながら、むくれたような顔をして先刻から黙って立ちつくしているのである」や59行目「妻は列車の横壁にかかつてある青い鉄札の、水玉が一杯ついた文字を此頃習いたてのたどたどしい智識でもって、FOR A-O-MO-RI とひくく読んでいたのである」といった妻の素っ気ない様子は、飾らないだけかえってテツさんに近い存在であることを感じさせるものとなっている。

問5

Aさんのクラスで、「列車」についてより深く理解するためのグループ討論が行われ、そこで波線部「私は頼まれもせぬのに、テツさんを見送ってやろうと即座に覚悟をきめた。」という一節が話題となった。Aさんは、そこで生じた疑問について、「列車」と同じ短編集に収録されている「葉」という作品の一節を参照しつつ考えてみようと思い、その内容をノートにまとめた。次に示すのは、討論の中での【AさんとBさんのやりとり】と、【葉】の一節 および【Aさんのノート】である。これについて、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

【AさんとBさんのやりとり】

Aさん——一言で言えば、汐田を信じてはるばる東京までやってきたのに、ただ汐田にもてあそばされるだけの結果になったテツさんへの同情ということになるでしょうか。まだ機関車の時代で、情報だって今のようではないから、青森から東京に出てくるというのは、私たちが海外に行くのよりもはるかに思い切ったことかもしれないし、そういうテツさんの気持ちを考えると、「私」じゃなくても、テツさんは哀れですね。

Bさん——そういう意味での同情や思いやりが根底にあるのは確かだと思います。だからせめて自分だけでも軽んじられたテツさんを大切に扱おうという気になったんだろうと。でも、ちょっと気になるのはその直後にある「私にはそんな軽はずみなことをしがちな悲しい習性があったのである」という一文です。「軽はずみ」というのは、この後に展開する見送りの場面をみればわかるように、実際にはたいしたことでもないのに思いつきで動くといったことかもしれません。でも、「悲しい習性」というのは、「私」はしばしばこういう心の動かし方をするということであり、そして、そのことを自分で「悲しい」と思っているということですね。

Aさん——たしかに気になりますね。すぐには答えが出そうにありませんが、考えてみたいと思います。

【葉】の一節

空の蒼く晴れた日ならば、ねこはどこからかやって来て、庭の山茶花のしたで居眠りしている。洋画をかいている友人は、ペルシャでないか、と私に聞いた。私は、すてねこだろう、と答えて置いた。ねこは誰にもなつかなかった。ある日、私が朝食の鰯を焼いていたら、庭のねこがものうげに泣いた。私も縁側へでて、にゃあ、と言った。ねこは起きあがり、静かに私のほうへ歩いて来た。私は鰯を一尾なげてやった。ねこは逃げ腰をつかいながらもたべたのだ。私の胸は浪うった。わが恋は容れられたり。ねこの白い毛を撫でたかと思う、庭へおりた。背中毛にふれるや、ねこは、私の小指の腹を骨までかりりと噛み裂いた。

太宰治「葉」（一九三四年発表、短編集『晩年』（一九三六年刊）に収録）

【Aさんのノート】

● Bさんとのやりとりで生じた疑問

・ X を、「悲しい習性」と言うのはなぜか。

←

● 「葉」の内容

・ 「私」が投げてやった鰯を「ねこ」がたべたことで、「私」は「わが恋は容れられたり」と感じたが、ねこの白い毛を撫でようと背中の中毛にふれたとたん、ねこは「私」の指を噛み裂いた。

● 「列車」の内容

・ 「妻」にはテツさんと似たところがあると思い、テツさんをうまく慰めてくれるだろうと連れて行ったが、思った通りの結果にはならなかった。

・ テツさんを慰めるつもりで、「災難」という言葉を使ったりしてしまった。

←

● 「疑問」への答え

・ 「私」が他者の内面をおしはかろうとすると、それはしばしば Y になりがちであり、他者に寄せる思いが、たとえ Z がゆえに、「悲しい習性」だと感じるのである。

(i)

空欄

X

に入る最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6

①

結果をかえりみず大胆に行動したテツさんの勇氣

②

テツさんへの同情や思いやりに発する自分の行動

③

親しい人を特別扱いしようとする普遍的な人間心理

④

自分がともすれば軽はずみな行動をしがちであること

⑤

楽観と悲観の間でいくども揺れ動いた心のありよう

(ii)

空欄

Y

に入る最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7

①

情緒的な判断

②

主観的な思い入れ

③

利己的な優しさ

④

理知的な計略

⑤

一方的なわがまま

(iii)

空欄

Z

に入る最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

8

①

自分に対して正直なものであったとしても、自分を幸福にするとは限らない

②

相手にとっても幸せなことであっても、相手がそう感じるわけではない

③

自分の善意から発したことだとしても、相手には迷惑でしかない

④

相手のためと思つてのことだとしても、結果的に自分の利益にしかない

⑤

自分としては親愛によるものであつても、相手には必ずしも通じない

4 「列車」

解答・配点

設問	配点	解答番号	正解	自己採点欄
1	7	1	④	
2	8	2	③	
3	8	3	①	
4	各 5	4 5	①-⑤	
5	(i)	4	⑥	
	(ii)	4	⑦	
	(iii)	4	⑧	
小 計			45点	

* -(ハイフン)でつながれた正解は、順序を問わない。

出典

太宰治「列車」の全文、および(問5引用文)太宰治「葉」の一節(ともに短編集『晩年』に収録)。新潮文庫『晩年』所収の本文を底本とした。なお、出題に際し、省略、ルビを追加した箇所がある。

太宰治は、昭和の小説家。本名は津島修治。一九〇九(明治四二年)、青森県北津軽郡金木村に生まれる。生家は県下屈指の大地主。一九三〇(昭和五年)、東京帝国大学仏文科に入学。その頃から左翼非合法運動に関係するが、後、運動から脱落。生家との葛藤、過敏な自意識、社会や人間関係への不調和、新進作家としての苦闘等々、様々な苦悩の交錯する中、数度の心中・自殺未遂を繰り返し、ついには薬物依存のため強制入院させられる。東大中退。この間に書かれた作品を集めたのが、第一創作集『晩年』(昭和一一)である。その後、師事していた作家井伏鱒二の世話もあり、戦争が次第に本格化する中、新しく家庭を得て地道で安定した創作活動を開始。「富嶽百景」(昭和一一四)、「駆込み訴え」(昭和一二五)、「走れメロス」(同)、「東京八景」(昭和一二六)、「右大臣実朝」(昭和一二七)、「津軽」(昭和一二九)、「お

伽草紙」(昭和二〇)などを書き継ぐ。戦後は、戦中に抑えられていた現代の社会や人間がはらむ矛盾、それへの異議申し立て、そこから敗れ去っていく者の真実などを鮮烈に描き、多くの共感者を得る。「ヴィヨンの妻」(昭和二三)、「斜陽」(同)、「桜桃」(昭和二三)、「人間失格」(同)、など。しかし、一九四八(昭和二三)年六月二三日深更、一人の女性と玉川上水に入水、太宰三九歳の誕生日である一九日、遺体が発見された。

問題文の解説

本文は、第一の場面(冒頭〜8行目)、第二の場面(9行目〜29行目)、第三の場面(30行目〜末尾)の三つの部分に分けることができる。以下、各部分の話の要点と、主人公を中心に登場人物の心情の動きを確認していくことにする。

《第一の場面 列車(冒頭〜8行目)》

この小説は上野―青森間の列車の説明から始まっている。車両編成などの具体的な紹介が続く、その長い一文の終盤近くになって、この列車にある情調が付与される。「幾多の胸痛む物語とを載せ」がそれである。その「物語」は「万歳の叫喚で送られたり」(徴兵などによる別れ)、「手巾で名残を惜まれたり」(親しい者との惜別)、「鳴咽でもって不吉な銭を受ける」(死別になるかもしれないような別れ)、つまり《別離》の物語である。この小説では「列車」はそういう「幾万人の愛情を引き裂く《別離》の媒体として性格づけられている。

この「列車」は《第三の場面》に登場するのであるが、それを右のように性格づけて冒頭に置き、「げんに私が此の列車のため、ひどくからい目に遭わされた」と語ること、読者の興味を物語へと誘導している。

それは「つい昨年の冬」の話であり、「国元」すなわち青森への列車に乗ったのは「テツさん」、テツさんを東京から送りかえたのは「汐田」である。

《第二の場面 汐田とテツさん（9行目～29行目）》

汐田とテツさんは「同じ郷里で幼いときからの仲」であり、二人は結婚するつもりでいた。しかし、裕福な汐田の家では貧しい育ちのテツさんとの結婚を許さず、汐田は自分の父親と何度も烈しく口論した。「その最初の喧嘩の際、汐田は卒倒せん許りに興奮して、しまいに、滴々と鼻血を流した」というのだから、汐田はこの当時（旧制高等学校の学生時代）はテツさんとの恋愛や結婚に対していたって本気であり、真摯な情熱も持っていたのである。「私」が汐田の「そのような愚直な挿話」（今から思えばたわいのない挿話にさえ「胸を異様に轟かせた」のは、家柄・家格といった旧弊や父親の権威といった、（当時としては）抗いがたいものに抗つても恋を貫くという話が、「年若い」自分にかにもロマンチックに思われたからである。（↓問1）

私も汐田も高等学校を卒業し、東京の大学へ入ったが、その後「困難なとしつき」を送る私と「のうのと暮」す汐田とは環境も思想も著しく離反し、以前のようなむつまじい交渉もないままに三年が経過した。

その三年目の冬、突然、汐田が私の家を訪れ、テツさんの上京を告げた。それによると、「テツさんは汐田の卒業を待ち兼ねて、ひとりで東京へ逃げて来た」というのである。

三年前の私ならその恋の物語に胸躍かすところかもしれないが、一人の女と結婚していてもう「そんな若やいだ気持を次第にうしないかけていた」私には、むしろ、縁を切つてしまおうとしていた旧友にわざわざそんなことを言いに来る汐田の「底意」が透けて見える。それは一人の女が自分に恋焦がれ、故郷を捨てて出奔してきたということを友人たちに言いふらし、男としての自尊心を満足させるというものである。汐田はテツさんの出奔に狂喜し感激しているが、それが自尊心を満たされて有頂天になってののだということなら、テツさんは汐田の自尊心のために故郷を捨てたようなものである。テツさんは切羽詰まった切実な思いで東京へ出てきたはずである。だから、私は汐田の有頂天を不愉快に感じ、「彼のテツさんに対する真実を疑いさえ」する。

そして、この「疑惑は無残にも的中」している。もし、汐田がテツさんを

以前のように真摯に思い続け、父親に逆らった時のような気持ちでいるなら、そのままテツさんを受け止め一緒に暮らすことを自明とするだろう。しかし、汐田は小声で「どうしたらいいだろう？」と相談を持ちかけてきたのである。つまり、散々有頂天に話した後で声を潜めて（「どうしたものか？」）と言うのである。自尊心の満足とは別に、テツさんその人への気持ちの方向ははっきりしている。テツさんの思いを受けとめ、彼女のかねてからの念願通り一緒に生きようなどという気はないのである。「眉間に皺を寄せて」深刻そうにしているが、それはポーズであり、「どうしたらいいだろう？」は答えの決まっている問いにすぎない。汐田はいわば「モテて困っている」自分に酔いたいだけである。私はそんな「ひまな遊戯」に乗る気にはなれない。だから、汐田のもったいぶった心の内を暴露すべく「汐田の思うつぽを直截に言つてや」る。「君も慓巧になったね、君がテツさんに昔程の愛を感じられなかったなら、別れるほかはあるまい」。

しかし、汐田はこの私の暴露に対し悪びれる様子はない。「君がテツさんに昔程の愛を感じられなかったなら、別れるほかはあるまい」という私の答えを聞いて「口角にまざまざと微笑をふくめて」いるのは、それがまさに我が意を得たりといったものだったからだろう。その直後の「しかし、と考え込んだ」というのは（しかし、テツさんとの約束を思うとそれでいいのだろうか）といったところだが、「口角にまざまざと微笑をふくめ」という表情の明度を見る限り、「別れる」のが本意で、「考え込んだ」のはポーズである。（↓問2）

四五日して、案の定、汐田はテツさんを「くにへ返す」と速達で知らせてくる。そこに「あすの二時半の汽車で帰る筈だ」と書いてあり、「私は頼まれもせぬのに、テツさんを見送つてやろうと即座に覚悟をきめ」る。

私は自分には「そんな軽はずみなことをしがちな悲しい習性があったのである」と言っているが、この「テツさんを見送つてやろうと即座に覚悟をきめた」という心情は、思い余つて遠い郷里から見も知らぬ東京へ出てきた気持ちがあつた（ないがし）蔑ろにされ、捨てられるようにしてあつてなく帰されることを思うと、テツさんの存在があまりに軽くあしらわれているように感じられ、

それなら自分だけでもテツさんを大切に扱いたいという思いに発するものだろう。(付け加えて言えば、私が「別れるほかはあるまい」と言ったのは、汐田がすでにそう心決めにしていることを悟ったからであり、その時点でテツさんの存在が蔑ろにされることをどうすることもできなかったのである。)

《第三の場面 見送り〔30行目〜末尾〕》

朝から雨の翌日、私はしるる妻をせきたてて、一緒に上野駅にテツさんを見送りに行く。妻を連れて出たのは「妻も亦テツさんと同じように貧しい育ちの女であるから、テツさんを慰めるにしても、私などよりなにかきつと適切な態度や言葉をもってするにちがいないと独断したから」である。しかし、この期待ははずれる。二人は「お互に貴婦人のようなお辞儀を無言で取り交しただけ」となる。

この私の思いの空回りは、この場面にもう一つあると考えられる。それはテツさんが意外に元氣そうなことである。「あれから見ると顔の色がたいへん白くなって、顔のあたりもふつくりとふとっているのであつた」。つまり、テツさんは三、四年前に郷里で会ったときよりも健康そうであり、また、「私が声をかけたら、すぐ列車の窓から半身乗り出して嬉しそうに挨拶をかけたのである」。内心はともあれ、傷心に沈んでいる様子ではない。

テツさんと妻は天候について二言三言話し、それが終わると、皆話すことがなくなり、「テツさんは、窓縁につつましく並べて置いた丸い十本の指を矢鱈にかがめたり伸ばしたりしながら、ひとつ処をじっと見つめている」。私の思うテツさんは汐田に「恥かしめられ汚されて帰郷して行く」女性である。私はその存在をせつなく感じる。本当はテツさんがここで何を思っているかはわからないのだが、私にとってはこのただ発車等待つだけの姿がいたましいのである。だから「私はそのような光景を見て居れ」ず、「テツさんのところからこっそり離れて、長いプラットフォームをさまよい歩」く。

その歩いた先で、私はある国(中国)との戦争に動員された兵士が「三輛目の三等客車の窓から、思い切り首をさしのべて五、六人の見送りの人たちへおろおろ会釈している」光景を目にする。この時「私は見るべからざるも

のを見たような気がして、窒息しそうに胸苦しくな」るのであるが、これはなぜだろうか。たぶん、単に戦地へと赴く兵士だからというだけではない。見送られて「おろおろ会釈している」兵士の「おろおろ」は、自分に降りかかる事態に翻弄され、それを抗いもならずに引き受けて生きる者の存在の表情である。心ならずも「三等客車」に人生を運ばれていく者の存在が私にはそう見える。彼は降りかかる事態に対してうまく立ち回ったり、小ずるく生きたりということができない。申しわけも申し立てもしない。私はそういう者をいたましくも、また、そういう者を前にしていたたまれなくも思うのである。

テツさんに対する感情もまたそれと相同である。「いま、こうして兵士を眼の前に凝視し、また、……テツさんを眺めては、私のあんな申しわけが立つ立たぬどころでないと思ったのである」。(↓問3)

いよいよ発車三分前となり、テツさんに何か言つてやりたいが、その言葉も考えつかず、また、助けになるかと思つた妻も黙つて立ちつくしており、しかたなく私はテツさんの窓の方へ近づいて、発車間際、とにかく慰めようと言葉をかける。慎重に言葉を選ぶ余裕もなく「災難」だと思つて……といった不用意な言葉を使つたりしてまごつくが、妻はそんな私をよそに「列車の横壁にかかつてある青い鉄札の、水玉が一杯ついた文字を此頃習いたてのたどたどしい智識でもつて、FOR A-O-MO-RIとひくく読んでいたのである」。

やはり私だけがあたふたしている感がある。私が思うようには妻もテツさん自身もいたましいという感情を共有しない。それは現実というものの彼の彼女の感度であり、従順さである。テツさんについて言うなら、端から見れば残酷とも言える現実に流されていくことへの従順さであり、それはそのままこの「列車」に運ばれていくことへの従順さである。私は、そういう者たちをいたましく思い、そのいたましさにおいて、その存在をいとおしく思うのである。

設問の解説

問1	問2	問3	問4	問5
統合・解釈	統合・解釈	統合・解釈		
構成・表現				
	熟考・評価			

問1 正解 ④

部分の記述に基づき登場人物の心理を読み解く**統合・解釈**。

問題文の解説

《第二の場面》の最初の部分で解説した通りである。正解

は④。20行目に「そのころには……いまさら汐田のその出来事に胸をときめかすような、そんな若やいだ気持を次第にうしなにかけていた」とあるのを裏返せば、傍線部Aは〈かつての自分が抱いた、テツさんと汐田との恋愛に「胸をときめかす……若やいだ気持」を示すものだということになる。傍線部Aの「胸を……轟か」すがここでは「胸をときめかす」と言い換えられており、この表現からしても④「……純粹でロマンチックなものに思われた」という心理であることがわかるだろう。以下、他の選択肢の誤りを指摘しておく。

① 「正義感にひどく感動した」が解釈としてずれている。先の「いまさら汐田のその出来事に胸をときめかすような、そんな若やいだ気持を次第にうしなにかけていた」という文言からも逆にわかるように、私が「若やいだ気持」で「胸をときめかす」（＝「年若い私の胸を異様に轟かす」）のは「その出来事」（汐田恋しさにテツさんが故郷を出奔した）のような事象、すなわち恋愛ロマンである。「正義感」に胸を轟かすわけではない。

② 「義憤」とは〈不正なことに對するいきどおり〉のことだが、「義憤に駆られた」も「正義感」同様、ここでの胸を轟かす理由ではない。

③ 汐田とテツさんの状況が「実は自分が置かれている状況」だと判断できるころはどこにもなく、したがって「その一致に驚きと心からの共感を持った」も誤り。

⑤ 「恋愛の行く末に、強い好奇心をかき立てられた」に問題がある。「行く末」というより、そのとき汐田とテツさんが置かれていた状況に胸を轟かせたのだろうし、それは「好奇心」というものとも違う。

問2 正解 ③

部分の記述に基づき登場人物の心情を読み解く**統合・解釈**。

問題文の解説

《第二の場面》の半ばの部分で解説した通りである。正解は③。以下、他の選択肢の誤りを指摘しておく。

① まず「そう言うであろう友人に相談した」に問題がある。「私」が「別れる」と言うだろうことを汐田が予測したとまで読めるころは特にない。さらに「それを表情には出すまいとしている」は明らかに誤り。「しかし」と考え込む前に「口角にまざまざと微笑」を浮かべている。

② まず「実のところ別れるかどうか迷っていた」に問題がある。「汐田の思うつぼを……」「まざまざと微笑」とある以上そうは読めない。したがって「気持ちが決まっていた」ともおかしい。さらに「それで本当にいいのだろうか」と再度自分の本心を確認しようとしている」も誤読。「しかし、と考え込んだ」のはポーズであろう。

④ ②の前半同様「別れようとしていた心が揺らいでいた」とは読めない。「これからどうやって相手に別れを切り出そうかと思案している」も誤読である。

⑤ 「そういう自分の小ずるさをほめてくれたと思得意になった」が誤り。「口角にまざまざと微笑をふくめ」たのは〈ほめられてうれしかった〉という感情ではあるまい。

問3
正解 ①

本文全体を踏まえつつ登場人物の人物像（についての心情）を読み解く
統合・解釈。

《問題文の解説》

《第三の場面》の半ばの部分で詳しく解説した。正解は

①である。テツさん（や出征する兵士）のあり方そのものはもちろん、例えば汐田のテツさんに対するふるまい方との対比を考えても、①「うまく立ち回ったり小ずるく生きたりということができない」というとらえ方が適切だと判断できるだろう。以下、他の選択肢の誤りを指摘しておく。

② 端的に「嫌悪感」が誤り。そう読みとれる箇所はない。

③ 「私」は「窒息しそうに胸苦しくなつて」いる、というのだから、「周りの人の好意にそつなく応じ」られるか否かといった次元の話ではない。

④ 端的に「苛立たしく思う気持ち」が誤り。「いま、こうして兵士を眼の前に凝視し、また、恥かしめられ汚されて帰郷して行くテツさんを眺めては、私のあんな申しわけが立つ立たぬどころでないと思つたのである」の文言一つとっても、②「嫌悪感」や④「苛立たしく思う気持ち」はありえない。

⑤ テツさんや兵士本人は、「つつまし」く、また「見送りの人たちへおろろ会釈」するばかりといったように、自らの運命を受け止めているのであって、⑥「絶望の淵へと沈んでいく」とまでは言えない。そうであるからこそ、見ている「私」はなおさらいたたまれない思いになるのである。

問4
正解 ①⑤

小説における表現とその効果や意味を考える 構成・表現。
順に選択肢を検討していこう。

① 《問題文の解説》

《第一の場面》を参照。問題なく言いうる。適当である。

② 「汐田はきつと永久に私から遠のいて了うつもりであつたらしい」は「私」が「汐田」についてそう思ったということであり、視点は「私」のものである。この小説は一貫して「私」が語り手であり、すべて「私」の目を

通して描かれている。

③ 「どうしたらいいだろう？」や「しかし」が「汐田が言ったことの一部にすぎない」と見る根拠はない。「」を使わないのは、汐田の台詞も私の台詞も、「私」の述懐の一部として、他の情景や表情や出来事と同等に扱われているからである。

④ 「思わぬ上品さをかいまみせたのを面白がつている」が誤り。「貴婦人のような」は（気取っている）という程の意味で、本当に「上品さ」をのぞかせたわけではなく、柄にもないような振る舞いをしたということである。また「面白がつている」のではなく、期待を裏切られて面食らっているのである。

⑤ 「妻」が「テツさん」に対して、「私」が期待したあり方とは違い「素っ気ない様子」なのは、妻がテツさんに過ぎた同情をしていないからである。つまり、私はテツさんをいたましく思う心理的位相を持つが、妻はその位相を持たないのであり、それは（36行目にあるように）妻がテツさんと同じ地平にいるからである。すなわち、妻がテツさんに気を遣わない（挨拶以上に飾らない）のは、妻がテツさんを上にも下にも見ていない（存在として近い者同士である）からである（付け加えれば「私」が「適切な態度や言葉」（37行目）だと「独断」しているような言動をしないことこそが、彼女たちにとって「自然」なあり方なのである）。適当である。

問5
正解 (i) ② (ii) ② (iii) ⑤

二つのテクストを関係づける 統合・解釈 に基づき、登場人物の心情を推測する 熟考・評価。

まず設問文で示された《設定》を確認しておく。

・「Aさんのクラスで」行われた「グループ討論」で「話題となつた」、波線部「私は頼まれもせぬのに、テツさんを見送つてやろうと即座に覚悟を決めた。」という一節についての設問

・「討論の中での【AさんとBさんのやりとり】」をうけて、「列車」と同

じ作者の「葉」の一節を参照しながらAさんの考えたことが「Aさんのノート」

以上を踏まえて、順に考えていこう。

まず、波線部「私は頼まれもせぬのに、テツさんを見送ってやろうと即座に覚悟をきめた。」における心情自体は、「AさんとBさんのやりとり」の中で「テツさんへの同情」「思いやり」だと解釈されている。これについてBさんが、「ちょっと気になるのは」波線部（テツさんへの同情や思いやりから彼女を見送ろうときめたこと）について直後で「私にはそんな軽はずみなことをしがちな悲しい習性があったのである」と述べられていることだ、と言ひ、さらに「悲しい習性」というのは、「私」はしばしばこういう心の動かし方をするということであり、そして、そのことを自分で「悲しい」と思っているということです。Aさんも先のBさんの「ちょっと気になるのは……」をうけて「たしかに気になりますね」と言ひ、そのことについて「考えてみたい」と述べる。これをうけてAさんが「参照」したのが「葉」の一節であり、それらをもとに考えた内容が「Aさんのノート」である。「列車」「葉」はともに小説であり、もちろんそれぞれ独立した作品であるが、ここでは両者の背景に類似した心の動きがあるものと想定して考えてみる、ということである。

(i) 空欄Xは「●Bさんとのやりとりで生じた疑問」だから、先にBさん・Aさんが「気になる」と述べていた内容が入ることになる。②を入れば「テツさんへの同情や思いやりに発する自分の行動を、『悲しい習性』と言ひのはなぜか」となるので、これが正解。

「私」は自分の心の動かし方を「悲しい習性」と言っているものであって、①「テツさんの勇気」ではない。③「親しい人」だから「特別扱いしよう」としたのではなく、「軽んじられた」人への同情から「大切に扱おうという気になった」のであるし、⑤「普遍的な人間心理」ということでもない。④「ともすれば軽はずみな行動をしがちである」ということ自体は「悲しい習性」そのものであり、特に「疑問」ということにはならない。

い。（テツさんへの同情や思いやり）という、本来はプラス方向であるはずのものが、なぜ「悲しい」「軽はずみな行動」「ともすれば……しがち」といわれているかが「疑問」なのであるから、この点を明示した答えでなければならぬ。（問われていることの焦点）を突いた答えであるか否かに注意したいところである。⑥は「そんな……悲しい習性」の「そんな」が指す内容ではないし、（テツさんも喜んでくれるだろう）というのが「楽観」であり、実際に見送りにきてからの心情が「悲観」に当たると仮に考えたとしても、両者の間で「いくども揺れ動いた」わけではない。

「Aさんのノート」は次に、「葉」の内容を、

・「私」が投げてやった鱈を「ねこ」がたべたことで、「私」は「わが恋は容れられたり」と感じたが、ねこの白い毛を撫でてやろうと背中の中にふれたとたん、ねこは「私」の指を噛み裂いた。

とまとめ、さらに「列車」の内容を、

・「妻」にはテツさんと似たところがあると思い、テツさんをうまく慰めてくれるだろうと連れて行ったが、思った通りの結果にはならなかった。

・テツさんを慰めるつもりで、「災難」という言葉を使ったりしてしまっ

たとめている。

(ii) 右をうけた「疑問」（「テツさんへの同情や思いやりに発する自分の行動を、『悲しい習性』と言ひのはなぜか」への答え）が、

・「私」が他者の内面をおしはかろうとするとき、それはしばしばYになりがちであり、他者に寄せる思いが、たとえZがゆえに、「悲しい習性」だと感じるのである。

「ねこ」に対し「私」は「わが恋は容れられたり」と思う。（自分の好意をねこは受け入れてくれた」と、「私」は「ねこ」の内面をおしはか」っ

たのである（動物に「内面」があるかどうかは何ともいえないが、少なくとも「私」はそう思ったのであるから、「私」の心情を問題にしているこの設問についてはそれに沿って答えることになる）。しかし、実際には「ねこは『私』の指を噛み裂いた」。「私」の思いとは裏腹に（好意は受けいれられていなかった）のである。

「妻」についても、「私」は「テツさんをうまく慰めてくれるだろう」と思ったが、「思った通りの結果にはならなかった」。「テツさん」に対しては、自分としては「慰めるつもり」で話しかけていながら「災難」という言葉を使ったりしてしまっ「ているのである」。

以上を踏まえて、空欄Y・Zを考えよう。まず「私」が他者の内面をおしはかろうとするとき、それはしばしばYになりがち」については、「私」が「ねこ」「妻」について考えたことが、右に見た通り、実は（自分勝手な思い込み）だったことを考えればよいだろう。②「主観的な思い入れ」が正解である。

①「情緒的な判断」としただけでは読みとして核心を突いていない（どの方向に「情緒的」なのか明確に言えていない）。

空欄Yは「他者の内面をおしはかろうとするとき」の話である（他者に対する何らかの行為・働きかけの話ではない）から、問題は（正しく判断できるか否か）であり、（一人よがりの思い込み・思い違い）ということはあるが、③「利己的な優しさ」というのはおかしい（表現としての方向性自体がズレている）。また内容上も、特に「妻」については（テツさんのため（に妻に協力してほしい））と思っているのだから、「利己的な優しさ」ということにはならない。

④「理知的」というよりは気持ちが先行して失敗しているのであり、また、相手をだまそうとしていたりしているのではないのだから、「計略」もおかしい。

⑤「わがまま」とはふつう行為や行動について言う言葉であり、（他者の内面をおしはかる）ことに用いるなら②「主観的な思い入れ」の方が適切である。また、ここで「私」は（ねこのため）（テツさんのため

（に妻に協力してほしい））と思っているのだから、内容上も「わがまま」ということにはならない（「わがまま」に（自分の意思を通した）のではなく、（相手を思いやるつもりで、思い違えた）のである）。

次に「他者に寄せる思いが、たとえZがゆえに、『悲しい習性』だと感じるのである」については、「私」が「ねこ」「テツさん」に寄せた思いが、「私」の思いとは裏腹にねこに指を噛まれるという形で終わり、また結果的に「災難」という言葉でテツさんを傷つけることになったかもしれない、ということ踏まえているものを選ばばよい。⑤「たとえ」自分としては親愛によるものであっても、相手には必ずしも通じない」が正解である。

①はそもそも「私」が「自分を幸福に」しようという心情を持っていた（が、それが失敗した）ようにとらえており、不適切である。

②はまず「相手にとっても幸せなこと」が（まず自分にとつて幸せだ）ということを含意しているのが、テツさんと自分の場合について明らかにおかしい。さらに②は（自分の同情や思い入れは「相手にとつても幸せなこと」であるのは事実だが、相手は必ずしもそう感じるわけではない）という趣旨になるが、「私」はそう断定するほど思い上がっているわけではない。

③は「相手には迷惑でしかない」が言い過ぎである。ねこには「迷惑」をかけているわけではないし、テツさんも「迷惑」とまで感じているとは読めない（テツさんの人柄からして、あるとしても（困惑）であろう）。

④は「結果的に自分の利益にしかならない」がおかしい。ねこには指を噛まれたのだから、「私」は「利益」を得てはいないし、テツさんについても「私」の自己満足でしかなかった、といった言い方ならできるかもしれないが、相手が思うような反応を示さないことにうろたえて「もはや他人の身の上まで思いやるような、そんな余裕がな」くなり、自分でも適切だとは思えないような「災難」という言葉まで口走ってしまう、といった状態を「自分の利益」と表現するのは無理がある。